

第3章 本研修の成果と課題

1. 本研修の成果

本研修の成果としては、事後研修にて実施した整理と共有のためのワークから棚卸ししたとおり、アウトリーチに係るスキルや姿勢についての学び、リファー・連携についての学び、支援体制等についての学びの3つが挙げられる。

アウトリーチに係るスキル・姿勢については、研修で得られたものとして研修生から主に挙げられたのは図表 20 のとおりである。

図表 20 アウトリーチに係るスキルや姿勢について学びんだことと、その理由・エピソード等（研修生のワークシートより抜粋・一部整理）

スキル・姿勢について学んだこと	理由・エピソード等
当事者への考慮	<ul style="list-style-type: none"> ● 「場所（家庭）」に訪問するのではなく、「困難な状態に手を伸ばす」という考え方でアウトリーチを実施する。 ● その場所で、ありのままの状態に近い当事者に会うことで、当事者と適切な信頼関係をつくることができる。
危機管理能力	<ul style="list-style-type: none"> ● アウトリーチは当事者のプライベートスペースに踏み込むアプローチであり、それだけに当事者を傷つけてしまう場合や、傷つけられてしまうこともありえるので、慎重に対応する必要がある。家庭内暴力や自殺を想定しなければならないケースもある。 ● 当事者にとって、アウトリーチは人生の分かれ道にもなりえる。そのような当事者に関わる上で、共依存的な関係にならないことが必要だ。
当事者との適切な距離感	<ul style="list-style-type: none"> ● 距離が近すぎても支援は行き届かない。寄り添いながらも、単なる同調するだけでなく、意図を持って関わって行く必要があり、偏らない支援が大切だと思う。 ● 受入団体で同行したケースにおいて、当事者の興味や関心に沿って会話をしながらも、学校への登校についてタイミングをはかって話題をもちかけていた。 ● 当事者が真の意味において自立するためには、当事者に依存させないための適切な距離をとる必要がある。
病理性をふまえた見立てと医療的側面における相談スキル	<ul style="list-style-type: none"> ● 当事者の割合として、発達障害や精神疾患等を抱えている場合が高い。 ● 不登校やひきこもりの原因の一つに、発達障害が大きな割合を占め、統合失調症との見極めが重要になってきている。 ● 臨床心理士による講義では、当事者に正確な情報を示すことが支援者に必要との話があった。

	<ul style="list-style-type: none"> ● 当事者の状態を見極め、医療機関に誘導する必要があるか否かの判断が重要である。 ● 発達障害の有無によって、当事者への伝え方に工夫がいる。 ● ドクターと頻繁な連絡のやりとりをし、当事者個人の身体的・精神的な状態を把握した上で支援計画がたてられていた。
さまざまな支援分野や手法の知識	<ul style="list-style-type: none"> ● 支援者にはそれぞれ得意とする専門分野があると思う。しかし、それだけではなく、他分野の知識を貪欲に追求する姿勢が必要と思われる。 ● 知的発達、精神障害・疾患、認知機能、身体能力などのパーソナリティを捉え、特性に応じた関わりをしなければ、当事者を傷つけ、支援者側もトラブルに巻き込まれる可能性が高くなる。 ● 生活保護等の知識も備えていると、よりの確なアドバイスができる。
柔軟な対応力	<ul style="list-style-type: none"> ● 往々に、当事者やその家族の状況、環境は変化していくもの。理事長のお話から、外で会っている時と自宅で会っている時との当事者の表情や態度の違いに気付き、かける言葉や態度に注意を払った。 ● 一つのアプローチ方法に固執せずに、柔軟なアプローチを実施する。当事者の自宅へアウトリーチをしたが部屋に入れてもらえず、また、自分の部屋には他人を入れたくないらしいという時にどうするか。自宅以外のその子が行ける場所（公園、図書館、ショッピングセンターなど）へのアウトリーチもあり得る。 ● 当事者に会えない時は、声かけのみや手紙など、その場面に応じた状況判断と柔軟な行動が求められる。訪問に同行した際は、当事者に会えなかったが、スタッフがドア越しに自己紹介と、また訪問に来ることを伝えていた。 ● 事前の情報との違いに対応できるスキルと引き出しが多いほどの確でスムーズな支援ができる。
当事者の家族とのコミュニケーションと信頼関係	<ul style="list-style-type: none"> ● 当事者の家族とコミュニケーションをとり、信頼関係を築くことは重要である。アウトリーチの帰り際、当事者の祖父に呼び止められ「孫を早く就職させてほしい」と玄関で言われたことがあり、家族内で支援計画が共有されていない状況が見受けられた。 ● 当事者を支えているのは家族であるため、当事者だけではなく、家族も悩み苦しんでいる場合も多い。支援者は家族ではないので、家族が果たす役割・機能に働きかけることが大切。 ● 家庭環境を把握した上で、支援方法について家族の理解を得る。 ● 相談に来る保護者は、自分ではどうにもならなかったと判断している場合が多い。そのため、保護者が回復や回復後に対して希望を持てる支援が必要。

<p>観察力・洞察力</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 現場での状況及び当事者の微妙な変化を感じ取る力。部屋の様子や当事者の様子の変化から、今後の家族へのアドバイスや支援計画の修正をしていた。 ● 支援者が、五感を使い（様子や緊張感からの状況把握）、考える（能力や病態水準）ことで、当事者に適した関わりが生まれる。 ● 玄関の状態、キッチン、リビングなどから、家庭環境や当事者をイメージすることが求められる。 ● 表情や声のトーンなどから、現在の状態の見極めが必要。 ● 当事者が今どうしてほしいかなど、微妙な心の変化を読めることにより、当事者に負担をかけず、自発性も生かすことができる。家庭や自室の様子から、家族関係や病気・暴力の有無などの手掛かりを発見できる。観察することで、家族それぞれのストレスや問題が見えてくることもある。 ● 見た目の服装が着古したようなものや使い込んだものについては、あまり支援者から話題にしない。当事者から語られた場合は、支援者から話題を広げる。関係が築けたらじっくりと話しを聞く。 ● 当事者が興奮状態にある場合は、むやみに距離を詰めず、落ち着いたトーンで冷静さを提供する。当事者が作成したもの（文書、物）については、積極的に良い面を伝える。
<p>あらゆる事柄に対しての興味・関心</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 当事者とのちょっとした接点、または当事者の興味・関心を共有できると、信頼関係が構築されやすい。実地研修では、当事者の好きなカードゲームをしながらリラックスした雰囲気をつくり、近況の話を聞いた。 ● 当事者が好きなもの等を共有することで、段階を踏むきっかけとすることができる。 ● 当事者が安心して関われるアイテムがあると良い。対人関係には不安を持っているため、共通の話題があることは、人と会うことへの抵抗を下げる効果がある。話題が乏しいと思っている当事者にとって、共通の話題があることで話せる話題があるから会えるとの意見があった。
<p>雑談力</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● せっかくアウトリーチをして部屋に入れてもらえても、話ができなければそれ以上の関係性を作ることは困難。当事者からしたら、自分の分からない話を一方的にされることは苦痛かもしれない。 ● 沈黙がないよう、会話の話題を仕入れて、相談者が気まずい思いをしないよう配慮が必要。 ● 話すことが苦手な当事者が多いため、支援者が話題を提供していくことが必要な場面が多い。その時、当事者が話しやすい気持ち

	<p>になることも重要で、発話の心理的な抵抗を下げていく。話すことは苦手だが、聞くことはできるという当事者が多く、また、その逆もある。支援者が適宜対応することで、雑談した気持ちとなり、また会いたいと思ってもらえる。</p>
キャラ作り、安心感を持ってもらえる雰囲気作り	<ul style="list-style-type: none"> ● 対象者のトラウマ等を刺激しない。事前にある程度予測しておくか、または会った時に察知する必要がある。 ● 当事者は何かしらの困難を抱えているので、この人になら話しても良い、大丈夫だと安心してもらえることが必要。言葉で納得してもらうのではなく、態度で感じ取ってもらう。アウトリーチに同行した時、支援者の顔を見て安心して話されていた母親が印象的だった。
時間枠での訪問支援	<ul style="list-style-type: none"> ● 次回につなげる訪問支援になるよう、本人の負担を支援者側が気にかける。同行先の当事者は、アウトリーチを行って日が浅い。まずは安心して関わってほしいという関係性作りから始めていた。時間は1時間と、本人が毎週見ているテレビの時間までと決めていた。
事前情報とインタビュー、アセスメント	<ul style="list-style-type: none"> ● 経緯を知ることでイメージしやすくプランが立てやすい。 ● アウトリーチの時に情報が不足していると、行き当たりばったりの関わりとなり、適切なアプローチができない。情報があることで本人にとって負担がより少ないアプローチを考えることができる。 ● 家庭環境や生育歴、通院歴、利用している機関（医療、行政、福祉、教育 etc）などから、地域との関わりと一体で支援する必要性を判断できる。 ● 必ず3人のスタッフで対応する。支援計画をたて、3ヶ月たったらチェックする。
判断力	<ul style="list-style-type: none"> ● アウトリーチが必要かどうか、必要であっても自己の機関で対応可能かどうか、支援の体制はどうするのか、などの判断を正しく行わないと、結果的には支援とは言えなくなる。 ● 「いつ訪問するのが良い時期か」という判断ができないと、当事者の暴力行為、自傷行為、精神状態が悪化することも考えられる。 ● アウトリーチにおいても、小さい段階を踏んでステップアップしなければいけない。そのタイミングを見極めて、どのようなステップが適切かも判断する。
支援者支援	<ul style="list-style-type: none"> ● 支援方針を支援者同士で話し合ったり指導を受けられる体制作りや、一人の当事者を多角的に見る立場の人の存在が重要。 ● アウトリーチの経験が少ないピアサポーターが当事者に不安がられたため、理事長が急遽同行。ピアサポーターの不安や負担の軽減に配慮が必要。

生涯同行支援（の姿勢）	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労、就学だけでなく、社会参加を継続するという生活支援のためには、一時的な関わりでは不十分。研修先では、アウトリーチから寮生活まで支援している。就労後、就学後も自立生活をサポートしている。
当事者理解	<ul style="list-style-type: none"> ● 聞きとりの困難さがある。ピアスタッフによるレクチャー等で、何が重荷でどんな支援が必要だったか把握できる。 ● 積極的な相談意思のない当事者から支援ニーズを聴きとるには困難。そのため、当事者経験を持つ元当事者やピアスタッフからレクチャーを受け当事者理解を深める。
当事者のための情報収集・情報提供	<ul style="list-style-type: none"> ● 当事者に届けることができる情報は、なるべく多く持ってあり、その時必要であればそれを出すことによってラポールにつながる。情報を持っていなくても、その後にも調べるのが大切。今回の研修では生活困窮者に対するアウトリーチが多かった中で、当事者が必要としている情報は”仕事”であり、実際の企業が求人を出しているか、どんな人材を求めているかなど、具体的な情報を伝えることにより、関係が深まり信頼関係が築かれていた。 ● 当事者が関心を持ちそうな話題を知り、用意する（距離が近づく）。また、発展的な支援につながるような仕掛け、つながりになることを期待できる。学校、資格、仕事のパンフレットから、関心を持たせること、そのために何が必要かを組み立てていくことを本人にイメージさせられる。盛り上がり、楽しみ、意欲のかきたてから、自分の価値観や大切なものを尊重してくれる人がいるということから人へのつながりが生まれる。
当事者とのナナメの関係（お兄さん・お姉さんの役割）、ピアサポートの充実	<ul style="list-style-type: none"> ● 専門家よりも、素人の方が有効な場合がある。同じ立場（同じ人として）の方が心を開きやすい。ピアサポーターが当事者とカフェでお茶をしたり、自宅まで迎えに行き居場所まで一緒に同行するなど。 ● 非専門家であるからこそその寄り添い。柔軟性と対等性から、本人の気持ちが楽に持てる。
リファーマを含めた出口やゴールの見通し	<ul style="list-style-type: none"> ● アウトリーチには出口が必要。出口に向かうためには、支援計画が必須である。また、担当者の変更や、他の機関との連携の必要性が出てきた時にも支援計画書が役立つ。 ● 当事者と関わる中で、関わり始めや、関わりながらその人にとってのゴールを考え、そこに向けて支援していく必要がある。ただ、訪問して話すだけではなく、常にゴールを意識することで、当事者をゴールへと適確に誘導できる。 ● 先の見通しが見えないと当事者は不安になる。”自立”をするという最終目標に向かい、支援開始から出口までの基本プログラムが

	<p>きちんとあり、最初にそれを提示することによって、当事者家族に安心感を持ってもらえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 目の前の課題にだけ焦点をあてるのではなく、本人がどのように今後のキャリアを作っていけるかを想定して動くことでスムーズに支援が進められる。それぞれのスタッフが、支援の方向性やゴールのイメージを言語化していた。 ● スムーズな支援を行うため、言語化して伝えることで成果を見せる。バイトの話をも1回目で入れ、2回目以降スムーズにバイトの話を展開できるようにしていた。 ● アウトリーチから次のステージへつなぐ。自信回復から次のステージにつなぐまでがアウトリーチの役割と感じた。当事者の状態に合わせた社会資源の開拓とプログラム開発が必要。
--	---

連携・リファラーについて学んだことと、支援体制等について学んだこととしては、主に図表 21、図表 22 のようなものが挙げられた。

図表 21 連携・リファラーについて学んだことと、その理由・エピソード等

連携・リファラーについて学んだこと	理由・エピソード等
行動力	<ul style="list-style-type: none"> ● 支援者同士も複数で関わる場合は連携が必要だが、多忙さもあり実現できない傾向がある。 ● 一見、支援とは関係ないような所や、集まりなどへ出向くことで支援につながる。人脈ができたたり、支援のヒントを見つけることがあったりする。個人的なつながりから、支援システムに発展し、地域を巻き込んだ活動になっている。
認知度の向上	<ul style="list-style-type: none"> ● どこに頼めば良いのか選択肢に入るためには、メディア等の露出や、関連する資料やデータの公開が必要で、選ばれる団体になる必要がある。 ● 講演会などにおいて認知度を上げていく等、様々な機会を利用して認知度を上げる活動をしていた。 ● シンポジウムにおいて要点を伝えることで興味を持ってもらい、必要性を理解してもらおう。だが、深く伝える時間はない。そのため、強く関心を持って下さった方が他の機会に呼んで下さる、という種まきを行っている。
学校との連携	<ul style="list-style-type: none"> ● 通所型施設の指導員や教育相談センターの職員が一人一人のケースについて学校担任との連絡を密にしていた。担任教員が適応指導教室に通う生徒へ会いに来ることもしばしばあり、学校への登校を考えた時に、学校とつながっていることの大切さを学んだ。

	<ul style="list-style-type: none"> ● 不登校児童生徒に対して何度も自宅へ足を運び、時には偶然を装い会えるまで努力していた。 ● 全ての高校と関係を構築していくことは現実的には難しい中で、まずは幾つかの高校に対して重点的に関係を作る。 ● 元教諭などを相談役にして、ケースによって学校へのアプローチを変え、何度も足を運び、当事者のために環境を整えていた。 ● メモ帳、シールなどを作成し、教師の机に置いてもらう（教諭、学校の理解のため）。保護者や学校説明会へのアプローチも工夫。
地域との連携	<ul style="list-style-type: none"> ● ビーチバレー、ソフトボールといったスポーツレクリエーションを近隣の施設で交流して行っている。 ● 運動会や地域の行事に積極的に参加して、地域の理解と協力を求めている。 ● 資源回収のプログラムの時に、コンビニや旅館等協力店舗を巡回したが、その数に驚いた。個人宅の裏口から差し入れてもらうなど、関係構築されているからできること。 ● 市町村のケースワーカーの方々とは全員顔見知りで、常に情報交換がなされていた。
他の市の支援機関の情報提供	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域の面積が広い。通って行くことが大変な方もいる。相談へ来た保護者への情報提供。（例）うつ病を抱えていて、こもり気味の当事者へ、うつ病の方の就業をサポートする場についても情報提供。
アルバイト、就労体験先としての民間団体との連携	<ul style="list-style-type: none"> ● 商工会、企業のバックアップにより、資金とノウハウの提供を受け、当事者や家族支援を行政としてできないことを民間の力で行う。 ● 研修先の精神保健福祉士が地域の中小企業と人脈を作っていた。支援団体の取組を理解し、当事者の人柄や特徴の説明を聞いて、企業が社会貢献という形で雇用する。 ● 合宿型、通所型等の支援手法に限らず、町内との関係（理解）は重要である。 ● 普段から、商工会議所などの集まりに出席したりして、事業主や企業の人との関係作りに配慮している。自分たちの取組を話し理解をしてもらうことで、協力してくれる企業が増えた。
スキルを持った人材の登用	<ul style="list-style-type: none"> ● 行政書士の方がキャリアコンサルタントとして相談業務も行っていった。
大学との連携	<ul style="list-style-type: none"> ● 大学生ボランティアの活用。 ● IT 関連の就職や資格取得を目指す当事者が、大学で学生やス

	<p>スタッフと関わりながら、一緒にパソコンに取り組んでいた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 大学内のスクールソーシャルワーカーからのリファー依頼に対してノウハウを伝え、彼らの取組を励ましていた。 ● 教育学部生などを活用することで、若い支援者＝子どもと親しみやすい人を確保できる。有能な人、熱意のある人を見出し、スタッフに迎え入れていく工夫も重要。
地域にあるものを資源として何でも活用する	<ul style="list-style-type: none"> ● 近くの池でエビ取りなどのグループ活動をしたり、図書館を支援の場として活用する。
行政への働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ● 行政に働きかけ、地域における社会問題として対策案を提案するなど。
専門機関との連携	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域の医療機関との連携が強く診察への同行や、ドクターとのケース会議が、頻繁に行われているので安心できる支援を実施していた。 ● クリニックに同行。診察終了後、ドクターと意見交換の場を持つ。支援計画の見直しや今後の取組に、支援のペースなどについても、ドクターの意見を聞きながら決めていた。心身ともに自立を目指す場合には、医療との連携は不可欠。

図表 22 支援体制等について学んだことと、その理由・エピソード等（抜粋）

支援体制等について学んだこと	理由・エピソード等
家族支援	<ul style="list-style-type: none"> ● 3か月に1度、親族を招き当事者の近況報告や、現在どのような作業をしているかを親族に伝える。 ● 家族セミナーで、当事者の保護者の経験を、他の保護者に聞いてもらう。保護者同士の「ピア」な活動。お菓子を食べたりしながら、和やかな雰囲気だった。
情報共有	<ul style="list-style-type: none"> ● 組織内でも対応の統一が必要。経験や思いがばらばらのまま、支援を進めてしまう実態がある。 ● 組織外での連携について、事例検討会等、開催日をきちんと決め、予定に組み込むことで、関係者が集まりやすくなる。 ● 受入団体の事例検討会に参加した。そこはケースの話だけでなく、自由に仕事の上で気になることについて意見を出し合える場になっていた。お菓子も支援者の方々が持ちより、ざっくばらんに話せる雰囲気があった。 ● スタッフ間のミーティングや連絡が密にされている。組織体制作り、だれが欠けても同じ支援ができるということを重視している。

	<ul style="list-style-type: none"> ● 定期的に事例検討会を行い、一人で抱えずスタッフで情報を共有し考えていく場があった。
ワンストップの支援	<ul style="list-style-type: none"> ● 当事者個々によるが、ワンストップも可、リファー連携も可の状態にあることは、様々なニーズへの対応とスムーズな支援が可能になる。 ● ニーズに応じて提供できる支援機関を複数有していることで、学校復帰まで支援を滞りなく進めることができる。 ● 支援段階や当事者の特性に合わせて目的を持ち、担当を変えている。
人材育成	<ul style="list-style-type: none"> ● それぞれの部門に総括担当者を置き、やりがいをもたせることでそれぞれのスタッフが責任意識を持ち、熱意のある支援ができる。 ● 定例研修として、ニーズにあった勉強会や研修会が開催されていた。 ● 団体内で月1回サポステを閉めて勉強会の日を作り、実施していた。 ● 定期的に研修を行い、次に繋げる人材を育成し、相談支援の拡大を図りつつ雇用の場を創出していた。 ● 相談責任者を置き、ビギナーや経験の浅いスタッフを束ねて教育する。その進歩の状況や、停滞の具合を見て、指導、フォローする。 ● ニーズに合った研修、テーマに即した勉強会を同じ相談員同士で行う。それぞれの偏った支援パターンではなく、横並びの仲間の動きを見て、自分の参考にできる。
資金調達	<ul style="list-style-type: none"> ● 単体の運営ができない時のため、複数の事業を受託する。国レベル、自治体レベルでの取組を活用し、組織を維持できる体制を作る。 ● 入寮して何を当事者にしてもらおうかがとても重要。身体を動かす仕事を与えて、心身の健全化を図る。果樹の生産、6次産業へのアプローチにも取組んでいた。
支援メニューの工夫	<ul style="list-style-type: none"> ● 毎日日替わりでセミナーを実施。午前中に毎日来所することで、生活を習慣化したり朝起きるという生活リズムをつけられる。それに伴い、10時前やお昼休みもスタッフと同じスペースにすることが可能。単にそこに座っているのではなく、言葉かけや、何か作業をする等で意識付けしている。 ● グループワークは、当事者の状態に合わせて、3つのコースが用意されていた。実施に当たり、スタッフ以外のグループワーカーも外部から参加していた。依存度の高いグループから、自立して計画・準備・実施まですべて自分たちで行うグルー

	<p>ブへとステップアップしていくようにプランニングされていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「飲み会」プログラム等、当事者の就労生活・社会生活を支援するオリジナルなプログラムもあった。就労成功後、就労を継続するには職場の人間関係にも大きく左右される。飲みニケーションを円滑にするため、居酒屋でマナーや話題作りを実際に体験していた。 ● 合宿型の自立支援では、通所ではなかなか進まないステップをより早く踏むことができる。 ● 寝食をともにすることで、当事者の毎日の状態を観察できる。共同生活の中で、余計な言葉がけはいらない。当事者が自分で考え、自分の足で立つ訓練をする。人は自分自身でしか変えられない。合宿型の自立支援では、毎日決まった時間に起きて規則正しい生活をするのが最も良い支援で、入所当時から顔つきが変わってくる。 ● ソフトバレー、ソフトボールなど週に1回はスポーツの日を設けていた。練習試合の日などは当事者の人達の表情がよくわかり、うれしい、くやしい、など感情を表す言葉も多く出る。
<p>滞留させない居場所作り</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 施設でのデイケア事業は、当事者が安心・安全に過ごせ、他者との交流を再開していける場である。スタッフや当事者同士で、なれ合って、ぬくぬく居続けられないことに配慮した関係作りを目指していた。 ● 単なる居場所ではなく、目的を持って来ているんだと意識させていた。

さらに、本研修の成果として、本研修で学んだことが既に実際に活用されているということが挙げられる。その活用例は図表 23 の通りである。実施に当たった課題も挙げられているので、併記しておく。実施に当たって解決すべき課題が見えたことも、本研修の成果であると言える。

図表 23 本研修を通じて学んだことを活用している例

活用例	具体的な内容	実施に当たった課題
アウトリーチ	<ul style="list-style-type: none"> ● 不登校児童、生活困窮家庭向けの家庭教師型アウトリーチ。 ● 不登校の生徒へのアウトリーチ、メール相談等につなげる。 ● スクールソーシャルワーカーとして、学校からの依頼により、家族・当事者に接触する。直接つながり先を見出し、円滑なつながり役、相談者として機能する。 ● 相談者の自宅訪問（二人体制）による相談支援を、25年10月から開始。県との協働事業、利用者負担1500円、県からの助成1人2500円。平成26年3月までに30訪問を計画。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 学校の理解不足、閉鎖的な地域社会。 ● 学校長による依頼の他、どのようなやり方ができるか。支援できる範囲（同行、援助、出費、責任）の不明確さ。 ● 利用者負担が難しい事例がある。保護者からの依頼で支援するが、本人からの同意が難しい事例も多い。
アウトリーチ以外の支援	<ul style="list-style-type: none"> ● 研修先で取り組んでいたプログラム内容（絵本の読み聞かせ、ソーシャル・コミュニケーション・トレーニング）を取り入れている。 ● 当事者と興味関心を共有することで信頼関係を構築していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ● ボランティア支援員の必要、その人材不足。 ● 当事者一人一人に充てられる時間の確保。
家族支援	<ul style="list-style-type: none"> ● 当事者のみに焦点を当てるのではなく、家族関係も含めて俯瞰的に見ることで課題を見つける。 ● 親の会にてひきこもりの状況、要因、対応など自分の関わったケースも交えて説明。ひきこもりの予防にもつながる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 家族への分かりやすい説明やその場を作るまでの信頼関係。
人材教育	<ul style="list-style-type: none"> ● 所内研修の充実（インテーク研修や事例検討会など）、スタッフ間の信頼作り。 ● ピアスタッフや元当事者から当事 	<ul style="list-style-type: none"> ● 通常業務との日程調整。 ● スタッフ全員で研修内容の共有や検討会などができればよかったが、

	<p>者視線を学ぶ研修。支援の質向上のため、彼らを研修講師として招く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● アウトリーチについての事前研修の内容を学生、スタッフに向けて伝達研修。研修先代表理事を招いての研修実施。 ● 研修の配布資料と自分のノートのまとめをスタッフで回覧。個人的に質問がある人に対しては回答。 ● メンタル研修（精神・発達の障害に関する知識の研修）。精神・発達障害の名称、特徴、対応時に気を付ける点など。 	<p>時間がとれない。</p>
ネットワークの活用	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域の支援機関や企業も含めた幅広い連携。 ● 学校行事へ積極的に参加する。 ● 当方からリファーするであろう関係機関に対して施設レベルではなく、担当者レベルで顔をつないだ。 ● 各支援機関への研修報告によりアウトリーチの理解と意義の再確認。 ● 適応指導教室がない地域において学校支援を行うために民生委員等を活用したり、公民館を活用した居場所作り、その中で座学や勉強、楽器などを行い、学校と連携して授業時間にカウントしてもらおう。 ● 地域の若者支援団体が集う会に参加。情報共有することが出来た。 ● 近隣の作業所に見学に行き、仕事内容などを説明してもらった。今後、情報として当事者に伝え、就労移行に興味を持てるよう支援していきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 具体的な話し合いを持つためどの機関が中心となっていくのがベストか要検討。 ● 団体も自分たちのところだけで精一杯なところもあり、定期開催が難しい。
インテーク	<ul style="list-style-type: none"> ● どこまで聞くか、をそれぞれスタッフ間で話し合った。深く聞く人もいれば、個人情報又は専門外の 	<ul style="list-style-type: none"> ● 支援者によりインテークがまだ統一されておらず、必要な情報がまと

	<p>話なので聞かないといった意見が出た。どこまでインテークを取るか、団体に統一されなかったが、インテークシートを作成しチェックリストを活用するなど、動きが出ている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● アセスメントに役立つインテーク用紙を、インテーク時に聞くべき質問項目を考える時に参考にさせてもらった。 ● 実習先で使っていたシートを参考として、自分の所属団体のインテークシートを作成し導入した。 	<p>まっていない。</p>
ロールプレイング	<ul style="list-style-type: none"> ● 主に困難事例についてケース会議をすることはもとより、さらに困難な事例を規定しロールプレイを行うことで支援者のスキルアップと、当事者とのラポール形成につながる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 実際のケースには、様々な状況があり、対応する場所によっても条件が変わる。また、スーパーバイザー的な存在が毎回必要。
危機管理	<ul style="list-style-type: none"> ● 女性スタッフに対する性的事件を予防し、また、発生した時にその場で対応できるよう、防犯ブザーを携帯。 	
結果の客観化	<ul style="list-style-type: none"> ● サポステのように進学・就労等の数値の集計を行っているところ。 	
マニュアル化	<ul style="list-style-type: none"> ● 電話のかけ方や面接の仕方等の資料をマニュアルとして常に準備しておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 業務の多さからスタッフでは対応できずにいる。協力してもらえるボランティアを探しているところ。
啓発活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 一般向けパンフレットの作成・配布、アウトリーチの啓発を通じたひきこもりの理解促進。 	

2. 昨年度(平成24年度)研修の課題と、今年度における改善の取組

アウトリーチ研修について、昨年度は以下の課題が提示されていた。

1. 研修生と受入団体とのマッチング(実地研修先の調整)における受入団体への情報提供が不十分ではないか。

2. 過去の研修生が作成した実地研修記録や感想等を研修生に情報提供すべきではないか。

3. 実地研修でアウトリーチへの同行が実現できなかった場合、代替の学習機会を確保すべきではないか。

それぞれの課題について、今年度は以下の改善の取組を行った。

【1. 研修生と受入団体とのマッチング(実地研修先の調整)における受入団体への情報提供が不十分ではないか】

マッチング(実地研修先の調整)における受入団体への情報提供にあたり、例年に行っているとおり、研修生の略歴書や志望動機書を受入団体に送付した。また、研修生から受入団体へ事前に連絡することとし、実地研修の日程や必要な準備等について、双方が直接にやり取りをする機会を設けた。

なお、今年度の研修生について、内閣府において厳正に選考を行った。

【2. 過去の研修生が作成した実地研修記録や感想等を研修生に情報提供すべきではないか】

過去の研修生から情報を得られる機会として、今年度は事前研修において昨年度の研修生から、実地研修の内容や感想、留意点、本研修で学んだことなどについて、発表いただいた。

【3. 実地研修でアウトリーチへの同行が実現できなかった場合、代替の学習機会を確保すべきではないか】

受入団体に対して、実地研修におけるアウトリーチ同行の実現や、代替の学習機会の確保について配慮いただくよう事前に要請した。なお、今年度においては、全ての受入団体で当事者の自宅や関係機関へのアウトリーチの同行が実施された。全研修生が同行できた。

3. 今年度の課題とその改善方策(研修後のフォローアップの実施)

本研修により、各研修生が地域でアウトリーチや子ども・若者支援を的確にコーディネートできる人材として活躍することを期待する一方、これまで研修終了後の研修生へのフォローアップが十分にできていないことが課題として挙げられる。

現在、SNS 等を通じた研修生同士の交流を促すことで研修生のネットワークの維持・深化を図っているが、今後、支援の実施の場で、さらに研修成果が活かされるためには、研修後の研修生の取組について正確に把握した上で、どのような対応が必要かを検討すべきである。

そのため、研修終了後 6 か月後及び 12 か月後に、各研修生へアウトリーチの実施件数や地域でアウトリーチを普及させるための活動等の実績について、調査を実施する予定である。(研修生には協力依頼済みである。) 調査票(案)は図表 24 のとおりである。

図表 24 調査表(案)

(案)

平成25年度アウトリーチ(訪問支援)研修の修了者を対象とした
相談・支援実績や活動状況についてのアンケート

現在の所属団体・機関：

氏名：

担当部署・事業名：

項目	所属機関・団体	受講生	備考・追記
訪問支援件数			
リファ-研修			
オファー件数			
講演・シンポジウムの開催・登壇回数	(開催)	(登壇)	
ケース会議等への出席回数 (地域の複数の機関・団体が出席した会議等)			
本研修を通じて学んだ事柄を活かした新たな取組や事業等			
アウトリーチ(訪問支援)の実施や継続に関した諸課題 (アウトリーチに限らず、リファ-・連携等の課題も)			
あらためてアウトリーチ(訪問支援)研修の研修内容(研修内容に含めてほしいこと等)について、ご意見があればご記入ください			